



老子

^ 13  
638  
3





13  
638  
3

門  
普  
698  
卷

都老子卷之三目錄

烏鵲成橋之章  
上古衣裳之章  
中元祭靈之章  
和漢放生之章  
月光愛觀之章  
秋山成錦之章



老子

卷三







て口實といふ。按ずれば元淮南子に鳥鵲川は  
 橋と織女と渚とといふ文よりおとく。そ不續  
 齊諧記にもふも。桂陽乃成武丁といふ仙人も  
 い事といひり。一季に一夜遊ふといふ説は甚  
 浪説分ちざるも。世星と云ふを転事ハ理可む。  
 男セタと牽牛と号し。耕化とつゝとるふか  
 けはまら。女たかむと織女と名付く衣冠を  
 織なむといふとゆり。穀と衣冠ハ人間生  
 命に係る所といふ。二星と云ふ事ハ理  
 なり。故小日本にもい二星の和訓とたかづ

こふ。たかハ種也とて穀なり。とてハ機りよの  
 とて蚕織の事なり。とをばい四ふと天平勝  
 寶七年よりい糸とて海をらと云事根元  
 といふ。又中納言家持のよあるかさきとて  
 せらとてにたぐ霜乃白きとてんを夜を更  
 中をたといふ。このかさきはれとて二星とて  
 せらとて格別のも。是ハ月の中天を海を  
 たふと揚ふといふ。月は乃白きとて糸  
 といふ。たかならせ。小林祿尼の物也  
 といふ。







上古衣裳之章

楮乃葉小款と書して。乞巧尊（備）糸（糸）  
 いなる故也や。生（生）といふ。楮（楮）  
 其（其）なり。か（か）を（を）  
 いふ。ハ（ハ）なり。上（上）野（野）乃（乃）  
 其（其）事（事）を（を）  
 之（之）又（又）衣（衣）通（通）  
 の（の）も（も）ある（ある）  
 あり。故（故）小（小）上（上）の（の）代（代）乃（乃）衣（衣）と（と）  
 も（も）い（い）ふ（ふ）  
 楮（楮）の（の）皮（皮）を（を）剥（剥）く

打（打）を（を）  
 細（細）く（く）  
 裂（裂）く（く）  
 織（織）  
 時（時）  
 楮（楮）の（の）名（名）を（を）  
 麻（麻）  
 の（の）  
 本（本）  
 今（今）  
 神（神）  
 幣（幣）  
 麻（麻）  
 楮（楮）  
 紙（紙）  
 紙（紙）



抄と書くは後、糸篇と稱し、於てなり。後東  
 漢の和帝の時、蔡倫といふ者、初く紙と濂と  
 そめしと。云々も、蔡倫より前、亦有しと。初  
 漢に趙飛燕が傳はし紙の事と云ふは、蔡倫  
 中、めく精しく、皇、濂とせしと云ふ。日本に於  
 け、推古天皇十八年、高麗より曇徴と云ふ者、  
 て、太子と云ふく、りて、濂とせしと云ふ。まより、以後  
 色く紙の名おかく。民用の寶也なりと云ふ者、  
 於て、後、又、問、近世すと云ふ、と云ふ紙と、民  
 間、小用也。是、古より、事、也。書、て、い、く、す、と、

かる、の、り、上、右、入、糸、い、ま、ご、ん、中、右、濂、和、帝、  
 崩、し、後、後、東、宮、乃、御、息、所、帝、此、常、に、極  
 ろ、た、於、御、書、也、あ、の、め、法、ひ、て、濂、と、  
 書、字、の、料、と、せ、と、蔡、倫、の、か、是、より、と、云、と、公、家、入、料、  
 紙、也、あ、り、て、是、紙、を、宿、紙、と、水、雲、紙、と、も、う、す  
 雲、紙、と、い、ふ。と、云、す、と、さ、ぐ、角、一、紙、の、初、め、成、一、色、  
 き、と、あ、ら、西、土、小、と、二、生、り、る、お、や、天、工、開、物、と、い、ふ、書、  
 に、還、魂、紙、と、も、濂、と、い、ふ、事、と、い、ふ、也。蔡、倫、より、  
 世、亦、す、と、云、ふ、紙、屑、及、び、及、故、の、た、ら、ひ、と、あ、り、あ  
 て、又、中、と、い、ふ。紙、小、紙、ひ、と、用、ひ、る、り、宜、な、ら



物ふ近世民間小非人のことと云ふ。途中に爲  
 敷ら汚まきし紙と捨ひあひめて、又紙となり  
 て賣れをことあり。是も天地の二物の色を捨て避  
 危にほつて禱も。極貧賤乃族非人なりて、用  
 也海に紙を紙屋し。民間も貧賤あり、他人を  
 是と用ひる者あり。察するふ、或は佛法なり、所  
 海にひるひたる人なり。親氏乃道路に汚  
 まくるは、いれなどむろひある先、法衣をせしと云  
 りとす。その事成屋し。まき天竺ののり。日本  
 にくばきしりくひぬりあるべし。又一説下野の人

の吉畷に族賊と行きて用也。こまきといふく  
 いふ。紙を神あひて用れ、相あるは、法衣  
 紙と撰ふ屋とるり。たそくこととく神代紙  
 楮とぬさも名自て神小なり。そ、後紙と割  
 とより、紙と切りてぬさと、古に族は、さる  
 人、ぬさ、紙をて、代紙と、ら、中、小、色、の、紙  
 と、切、り、紙、の、紙、と、ま、せ、令、抄、り、國、の、境、或  
 ら、山、河、か、と、道、社、神、と、祭、り、あ、ら、る、子、子、向  
 て、落、り、平、安、と、祈、願、の、紙、り、今、法、衣、子  
 石、氏、也、と、か、く、祠、の、を、色、紙、も、ひ、り、道、社、神



成す。菅家の御祿あり。世々心はぬまら  
 河原の山に神の海ありといひける  
 是なり。はねさ代名と上古に死をねるを  
 蘇立の神なり。はねさ代名と棺中に今もし  
 今も死者に用ひられ袋と願陀袋といふ。誤  
 願陀袋といふ。天然の言葉。お食をす  
 ぬる。お食をす。お食をす。お食をす  
 さきより法をあらたき

中元祭靈之章

七月中旬盆祭として都鄙より小死亡者し

親父親母といふ事あるに。はねさ代名  
 蘇立の神と祭る事。在り。すといふ事あり  
 宜なり。志す。俗人の中。はねさ代名  
 墓所より。父母不逢ひ。妻も子も不逢ひ  
 菩薩と安置せり。彼も七月十六日。八日卒  
 中元小児の死亡せり。この日に死して地  
 冥途苦患とたまふ。しるす。我  
 七月十六日。彼も死す。いふ事あり。み



彼地産の造ふ。二三葉よりある感じり此小  
 児の足跡一面ふりしと親里見付らぬ其の  
 若小易多き六亡者けりなきは夜中ひまら  
 登ふ妙りて鬼く彼ところふ。何やしき事ん  
 ばら。いづ解しやんやと。生こていそ  
 想ドて。か屋らの親佛法小ます。親人小阿く  
 有事なり。司馬温公の奈めふ人の蘇生し  
 て地獄へり。焰魔王小阿ひり。まを治るも。佛  
 法後りて後ふみか人かくせら。是迷ひ極也。  
 若実小地獄極樂といふ家あり。佛法い海ど

後らざるせんも。此ひりる。一と中法ひり。一を  
 千載不易の論をま。地文公小学にも。雲精  
 たまひら。極寒の河原小。小児の足跡と親ら  
 見ら。わさる。いと何ら。我友せん。年湯治小  
 海ら。肘右の俗話す。及りる。持ふ七月十日  
 須な。まを。事。に地産考。く。り。虚説ふ。る。有  
 じ。ころ。こ。こ。ひ。ん。房。り。り。ふ。い。ふ。と。も。色。一。而。ふ  
 小児の足跡。何ら。別。る。地。産。考。お。に。ま。を。た。し  
 負。え。り。る。な。ら。不。の。考。ふ。た。つ。も。あ。れ。る。も。多。く。お。  
 真途。ら。事。も。る。小。児。の。足。跡。な。る。も。し。こ。ふ。



後きとも色角怪災故大驚ふ。尋りて色角加  
 里の小童云く。此は。阿志八。猿乃足跡あり。十三  
 日。夜里村より。地蔵寺へ。盆の供養を。饒  
 團子。松の皮を。持り。至る。夜中小。毎年の。猿  
 と。かりて。猿氏。多ら。ひ。亦。も。残。た。た。食。事  
 かり。び。亦。ち。猿所。少。く。い。ふ。も。大。き。成。猿。小。兒  
 七。八。年。む。ら。の。足。跡。と。い。は。身。あ。り。こ。た。ふ。  
 こ。色。小。く。疑。わ。暗。ま。ぬ。と。決。り。し。出。ま。り。我  
 り。亦。ゆ。り。く。愚。昧。の。者。に。は。か。り。く。に。は。て。理。を  
 考。へ。く。決。り。ふ。も。及。す。一。盆。ふ。ら。い。ど。り。り

小兒のありて。地蔵(系)詣を。り。か。に。志。く。後。に  
 阿志八。老。老。と。民。の。法。が。ま。き。ら。甚。知。恵。の。多  
 き。故。なり。是。と。た。決。り。す。て。し。こ。敬。ま。り。也。の。猿  
 一。に。も。か。り。し。ゆ。ら。ん。

和漢放生之章

馬端臨が文獻通考と。と。ま。ま。日。本。に。く。八。月。十  
 五日。放生會。あり。て。百。戲。と。呈。は。と。載。り。り。  
 養老四年。八幡宮。乃。神。託。小。く。綱。小。か。を。起  
 奠。と。放。置。に。く。り。鳥。を。心。と。放。り。り。古。き  
 事實。な。ま。ま。を。り。後。より。近。か。く。ま。る。ま。り。い。ふ。



ころなるを。我らふ我疑り。まゝ、異多ハ人間ハ  
 食物なる。不漢獵ノ者折角勞して取らる。我  
 と故の。其多を重んぢて。人間と混ぶ。志  
 た。然ふ。然ら。是神の法。く。か。一。然ふ。や。い。ふ  
 う。先生言く。曰放生の事。り。と。佛家。を  
 あ。ま。子。なら。儒教。と。ても。殺生。を。あ。て。好む  
 こと。わ。り。あ。ま。た。ち。殺。屠。を。理。ふ。あ。ら。り。て。は。多。獸  
 づ。ふ。及。む。に。人。百。も。も。殺。ま。を。道。と。ん。た。は。ば  
 佛法。小。林。几。綱。經。に。曰。世界。は。有。一。切。の。男子  
 ハ。是。皆。我。父。世界。に。一。切。の。女人。も。ま。ま。皆

我母とたなく。故ふ。去道の衆生。人。百。も。及。む。に。
 鳥。獸。真。虫。小。鳥。等。近。是。み。か。我。父母。なら。る。を。と。又。
 我。が。故。の。父。を。ら。も。ら。も。ら。も。ら。を。殺。す。時。
 我。が。父母。を。殺。す。不。同。一。と。是。ハ。僧。の。戒。と。不。か。も。
 多。く。き。ま。る。が。我。が。俗。の。よ。も。と。を。行。は。志。む。
 子。理。ふ。も。む。け。り。唐。ふ。も。放生。池。と。名。付。く。處。
 ところ。よ。し。歐陽。永。叔。の。碑。乃。銘。中。の。生。ハ。古。き  
 なる。し。と。え。ら。り。昔。の。後。う。耶。鄂。こ。の。前  
 の。百。姓。正。月。元。日。ハ。鰓。と。閑。子。と。の。於。不。の。比。久  
 献。ト。け。ら。ふ。簡。子。孫。の。が。怪。し。百。姓。不。學。く

百七

三

十



麋鹿を殺して小簡子が側小居る者問ていまく  
 いうるをかくも後入したる也といむ簡子こ  
 たくといふやう。正月正且に生る物を放せし民  
 小恩の多しと示すと客のいまく君生物を放つ  
 とゆふととまはば百姓を養ふて生物を捕ら  
 又天小欲せん志うに付る却死するを多う  
 しるる生るしりど好たまはる。民と捕りて  
 志むるゆかりしり少く志しといふも簡子も  
 理ふてくしりらと列子も身之りら。ゆひの理を考  
 む。今世の放生、あまり功德小く憐れむ。

又或人の以て穀を糞とす人問を食物也。天  
 もらあてふふと云く。理ふ好むて漢捕るる有。  
 是も誤らるん。穀のなりき固り又穀不足は  
 なく。穀と常に食ししり是悲からん。  
 穀も沢ふらるるをたにく。又味の為ふらる  
 求め食ふり理ふらるる。土地の宜しきふ  
 志さふふ。又穀を不糞とすても天ら  
 人乃の食ふりたたまはるる。是は人乃  
 の智恵して常に食物中は糞、糞よりハ糞  
 糞よりハ糞と品とすら食ふりて人ら



故不列子にも是等の理と薄せり。蚊蚋の食ふ  
 虎狼といふも、物に人膚肉と食ふ天心有  
 て虫獸の食ふ人の肉と生るにあつては記せり。  
 是れもけり。嘗てふ所、きふ志、さぐひ食ふ  
 こや。自然の理といふ處。自然の理がさ  
 きて、何あり自然す。これと今日人世さふ  
 に似たり。昂去年八月十日深川、樓へ上  
 るべし。ゆるふ。まし門。おの市。中。お。並。觀。役  
 列。お。さ。り。き。あ。ふ。是。も。我。が。生。と。遂。る。ゆ。へ。派。も。成  
 海。で。け。も。と。な。何。と。さ。り。ゆ。に。や。見。苦。め。り。と。さ。

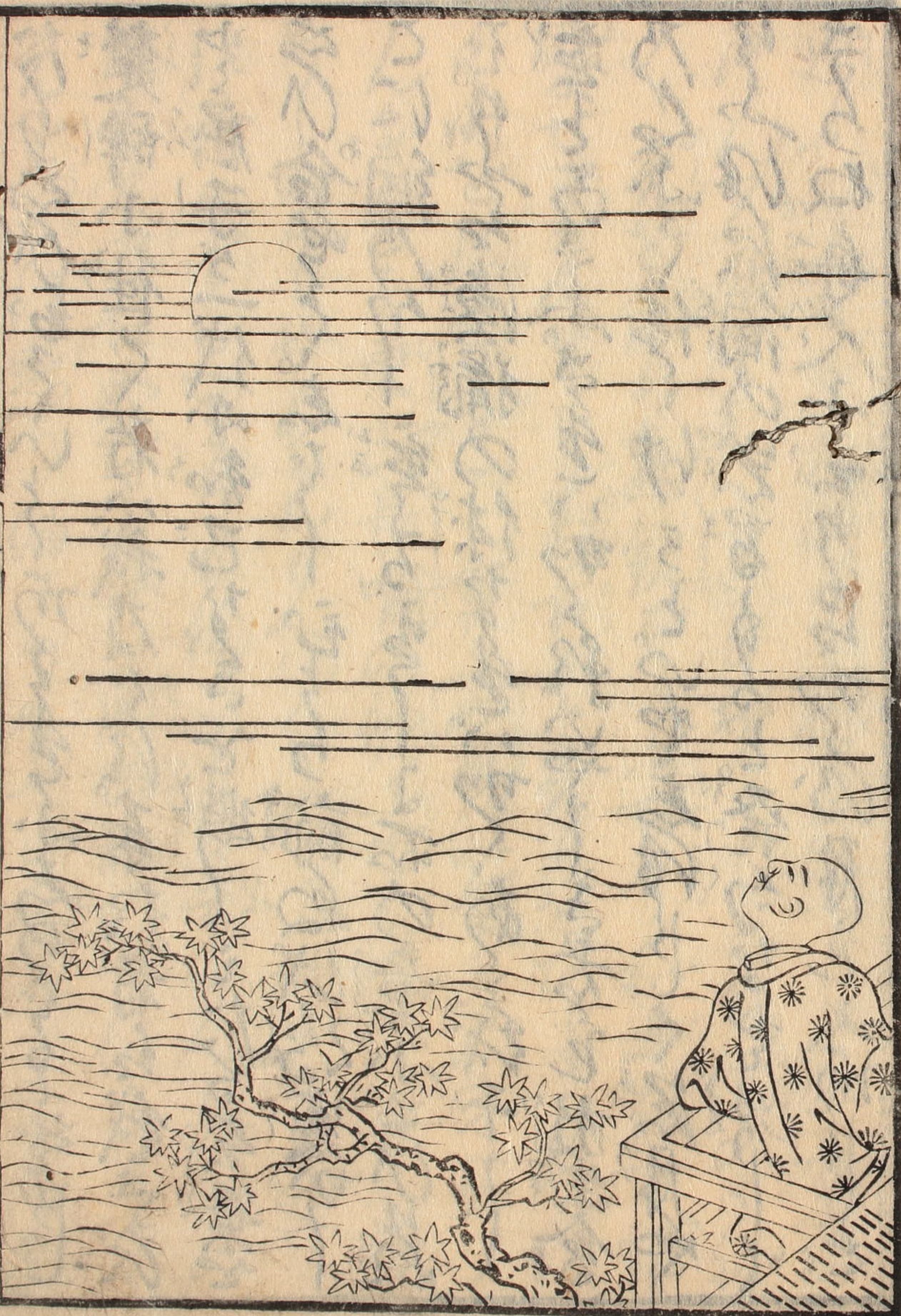
おぢやう

月光愛觀之章

一日深川小て極真一。月とやかむく。病  
 もら小。私。小。掉。け。して。海。り。ぬ。名。ふ。何。ふ。今。曾  
 乃。月。ア。ん。と。く。愛。か。し。道。遠。志。り。ふ。い。川  
 志。り。他。也。也。の。前。小。名。ぬ。志。が。し。屋。す。と。人  
 り。ふ。東。乃。海。は。し。ら。月。い。も。あ。く。あ。ら。何  
 里。さ。海。た。ご。ひ。か。り。市。中。に。く。身。り。身。不。替。り  
 祿。も。所。り。ら。入。名。海。し。り。死。ぞ。ま。る。罪。な  
 くて。死。不。の。月。詠。して。古。人。の。ま。る。り。目。れ。あ

都花子







たりの心はあきいしく何事もふたりの心をせりし  
楚辞小往く者、我及だん。事お者れ我さだ  
や、屈子一代不知己なきを逃くしたる云葉を  
その命をく。志なき一むらり節ぬげの愛か  
こに細乃り。愛するま。その量ふさひれ  
を。その漢獵の体なきばかりあ。我干し  
重とあふ。さきよハか。軽いや。き老を。教生會  
乃らふく。体とけうと。心と志。厚しく。忘月や  
り。おはに細の愛。有ると。奈うなきを。吟して  
さらぬ。每人。すまら。おから。の。有。を。又。何。と。と

思ふいふも。身と。り。う。と。擗。さ。ん。一。家。居。ふ。海  
所ん。名。残。り。た。き。る。や。う。し。そ。浪。の。う。糸  
く。光。と。依。り。熟。観。も。る。古。今。和。漢。月。と。観  
愛。せ。ざる。人。な。し。美。古。を。老。り。と。何。く。も。あ。は  
く。何。と。た。ぐ。ざ。り。こと。実。不。賞。員。の。毎。さ。乃。才。あ。り  
ん。ま。ま。も。じ。東。山。長。嘯。の。歌。ふ。世。に。此。人。乃。有。ハ。詠  
め。し。か。も。撫。を。お。り。ハ。く。ぬ。う。と。被。り。か。と。詠。す  
と。奇。か。と。じ。な。り。り。後。う。と。云。ふ。及。だ。ん。の。い  
圓。少。色。中。右。あ。六。十。年。が。間。其。礼。の。中。に。も。有。の。を  
光。と。葉。に。照。り。海。さ。り。ぬ。ふ。り。仰。が。さ。し。あ。や

楚辞

卷一

一











程状の程りたりと相余種小乃と相と  
てと訓をとも誤りたりとあると  
陰程の山より名づきとめて里へ  
す程故小玄有法平乃小家  
の義とこが好きとまじり  
くら紫こよあり。又花と陽程の里より  
後くふふの月あり。又續古今宮内  
見後せと禁をらに候とめて花も  
みよと野をふとよあり

都老子三終





